

牛呼吸器病に対する治療 ならびに予防の実際と問題点

加藤 敏英 先生

NOSAI山形 中央家畜診療所

日時 平成24年8月10日（金）

15:00～17:00

場所 日本生物科学研究所 管理棟 会議室2・3

要旨

牛呼吸器病（BRDC）は発生率が高く、我が国の肥育牛では30%を超えている。このことは、産業動物臨床獣医師が各種抗菌剤を使用する頻度の高さと予防の重要性を示している。抗菌剤の繁用は薬剤耐性菌出現を招き、このことが社会的に注目されており、獣医療においても抗菌剤の慎重使用が求められている。今回は、BRDCに対する治療と予防について、臨床における実際と問題点を中心に提示したい。

1. 起因菌分離状況

発症牛と健康牛を対象に上部気道（鼻腔深部）ぬぐい液を材料として1986年から継続的に調査している。年度によって分離率は差があるものの、概ね*Pasteurella multocida*は70～80%、*Mannheimia haemolytica*は10～25%、*Mycoplasma bovis*は30～40%程度であり、この数字は発症牛と健康牛で大きな開きはない。大雑把ではあるが、農場への菌の浸潤状況を捉えることは治療だけでなく予防にも重要なことである。

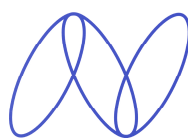
2. 起因菌薬剤感受性

最近の話題は、多剤耐性マンヘミア6型の蔓延とマイコプラズマのマクロライド系抗

菌性物質に対する感受性低下である。多剤耐性マンヘミア6型はフルオロキノロン系抗菌性物質にも耐性を示すことが多いといわれている。また、*M. bovis*は宿主の免疫機構を回避する能力を持つといわれている。

3. ワクチンと飼養環境改善による予防策

従来のウイルス生ワクチンに加え、不活化ワクチンが汎用されるようになった。このことはBVDVの持続感染牛を作らないことに寄与している。また、バクテリアワクチンも普及しつつある。肥育農場と酪農場を比べると、BRDCワクチンの接種率は前者が圧倒的に高い。しかし、どちらにおいても飼養規模拡大の進行に伴う群管理が重要性を増すなかで、BRDC予防にワクチン接種は欠かせない。同時に、飼育環境（密度や換気）改善および胎子期から哺乳育成期にかけての栄養管理（免疫能改善）を併せて考えることが重要である。ワクチンの効果を上げるためにも、宿主と環境の不都合な要因を可能な限り低減しなければならない。



NIBS

主催

一般財団法人 日本生物科学研究所

<http://nibs.lin.gr.jp/>